

ウルドゥー語におけるヴォイス

萬宮 健策

1. はじめに

本稿では、印欧語族の中の現代インド・アーリヤ諸語（インド語派）の1つであるウルドゥー語のヴォイスを扱う。ウルドゥー語では、動詞の語尾変化および補助動詞を用いることにより、さまざまなヴォイスが表現される。大別すると、能動態と受動態とがある。ウルドゥー語では、能動文で表現できる文については、積極的に受動態で表現することはない。具体的には、日本語において「彼に殴られた」、「財布を取られた」、「雨に降られて困った」などに代表される文は、ウルドゥー語では能動態で表現される。一方で、「どうしても～できない」に代表される不可能表現にはしばしば受動態が用いられる。

本稿では、例文として挙げられた文を精査することにより、ウルドゥー語におけるヴォイスの特徴の一端を明らかにしてみたい。

なお、本稿における例文等はすべて稿末に掲げる規則に従ったローマ字転写により表記する。

2. 自動詞と他動詞、使役動詞

ウルドゥー語では、自動詞と他動詞を明確に区別する。あとで説明する完了分詞を用いる文では、その区別がより重要となる。ウルドゥー語の動詞は例外なくその不定詞形語尾が-nā で終わる。その語尾部分を-a に置き変えると完了分詞、-tā に置き変えると未完了分詞となる。その語尾は、主語（相当語）の人称（1～3人称）、性（男性か女性か）、数（単数か複数か）に応じて音が変化する。ほとんどすべての動詞が上記の規則どおりの変化をする。

多くの場合、自動詞、他動詞、使役動詞が、あるいは他動詞、使役動詞、二重使役動詞が1つのグループとして認識されうる。たとえば、

前者の例としては、uṭṭhānā（起きる） uṭṭhānā（起こす） uṭṭhānā（起こさせる）

後者の例としては、k'ānā（食べる） k'hānā（食べさせる） k'ilwānā（（仲介者を介して）食べさせる）

が挙げられる。ウルドゥー語においては、二重使役動詞の存在が、しばしば特徴の1つに挙げられる。ここで言う二重使役動詞とは、仲介者（あるいはモノ）を介して行われる動作を表す動詞である。以下例文が示すとおり、仲介者を含むか、含まないかで異なる動詞を用いて表現する。

例1) 私は、彼らに(直接)歌を聞かせた(歌ったのは「私」).

māī ne un ko gānā sunāyā
私 OBL.1.sg. ERG.pp. 彼ら OBL.3.pl. DAT.pp. 歌 NOM.m.sg. 聞かせる PERF.m.sg.

例2) 私は、彼らに iPod で歌を聞かせた.

māī ne un ko āipāḍ se gānā
私 OBL.1.sg. ERG.pp. 彼ら OBL.3.pl. DAT.pp. iPod OBL.m.sg. ABL.pp. 歌 NOM.m.sg.
sunwāyā
聞かせる PERF.m.sg.

ウルドゥー語では、他動詞完了分詞を用いる文にのみ能格構文(ergative)が現れるのも、特徴の1つと位置づけられる。上記の2文においても、動詞の語尾は、主格に置かれる直接目的語である「歌(男性名詞単数形)」により決定されているのが見て取れる。

しかし、後述する補助動詞が自動詞の場合、意味上は他動詞文であっても、文の構造上、能格にならない。例4では、他動詞完了分詞が用いられないからである。

例3) 我々は仕事をした.

ham ne kām kiyā
我々 OBL.1.pl. ERG.pp. 仕事 NOM.m.sg. する PERF.m.sg.

例4) 我々は仕事をした.

ham kām kar gae
我々 NOM.1.pl. 仕事 NOM.m.sg. する STEM 行く PERF.m.pl.

3. 受動態

ウルドゥー語では、受動態は「他動詞完了分詞+補助動詞 jānā(行く)の変化」という形で表される。能動文における直接目的語の性・数に応じて下線部のような変化をする。

例5) 部屋(単数)が与えられる.

kamrā diyā jātā hai
部屋 NOM.m.sg 与える PERF.m.sg. 行く PRES.m.sg. コピュラ PRES.3.sg.

例6) 部屋(複数)が与えられる.

kamre diye jāte hāī
部屋 NOM.m.pl. 与える PERF.m.pl. 行く PRES.m.pl. コピュラ PRES.3.pl.

例7) 本(単数)が読まれる.

kitāb parhī jāī hai
本 NOM.f.sg. 読む PERF.f. 行く PRES.f. コピュラ PRES.3.sg.

例8) 本(複数)が読まれる

kitābē	par ^h i	jāti	hāi
本 NOM.f.pl.	読む PERF.f.	行く PRES.f.	コピュラ PRES.3.pl.

ウルドゥー語では、主語が女性名詞(相当語)の場合、コピュラ動詞を含む補助動詞の部分のみが複数形となる。意味を示す本動詞は、補助動詞がない文に限り女性複数形語尾を取る。

4. 例文の検討

本章では、各言語共通の例文を検討してゆく。略語等は末尾の一覧を参照されたい。

(1a) (風などで) ドアが開いた。

darwāzah	k ^h ul	gayā
扉 NOM.m.sg.	開く STEM.	行く PERF.m.sg.

(1b) (彼が) ドアを開けた。

us	ne	darwāzah	k ^h olā
彼 OBL.3.sg.	ERGpp.	扉 NOM.m.sg.	開ける PERF.m.sg.

(1c) 入り口のドアが開けられた。

darwāzah	k ^h olā	gayā
扉 NOM.m.sg.	開ける PERF.m.sg.	行く PERF.m.sg.

ウルドゥー語における受動表現は、動詞完了分詞に補助動詞 jānā (辞書的な意味は「行く」)を付加して表現される((1c)参照)。完了分詞部分が直接目的語の性・数を、補助動詞の部分が性・数・人称を表示する。通常、能動態で表現できる文では、あえて受動表現をしない。たとえば、日本語での「彼に殴られた」や「財布を取られた」という受動態を用いた表現は、ウルドゥー語では用いられず、それぞれ「彼が、私を殴った」や「私は財布を落とした」という文で表現される。したがって、上記(1c)の文は文法的には正しいが、一般的には(1b)の表現が用いられ、(1c)は、たとえば「裁判所の命令により」といった条件がつくなど使用環境が限定される。

(2) 私は(自分の) 弟を立たせた。

māi	ne	c ^h oṭe	b ^h āi	ko
私 OBL.1.sg.	ERGpp.	小さい OBL.m.sg.	兄弟 OBL.m.sg.	を DAT.pp.
k ^h aṛā	kar	diyā		
立った ADJ	する STEM	与える PERF.m.sg.		

ウルドゥー語では、自動詞の使役表現はできない。それにもっとも近い表現は下記(3)である。上記(2)では、「名詞(相当語) + honā (である)」という自動詞句「kʰarā honā」に対して、honā を karnā (する) に変更する「kʰarā karnā」ことで自動詞句から他動詞句へ変わる。「立つ」と「立たせる」ではこの関係が成立し、通常他動詞文として表現される。

(3)私は(自分の)弟に歌を歌わせた。

māī	ne	apne	chōṭe	bʰāī
私 OBL.1.sg.	ERG.pp.	自分の PRON	小さい OBL.m.sg.	兄弟 OBL.m.sg.
ko	gānā	gāne	diyā	
を DAT.pp.	歌 m.sg.	歌う INF.OBL.	与える PERF.m.sg.	

上記(3)では、「歌わせる」という表現が、動詞不定詞後置格形+補助動詞 denā で表現されている。この表現は下記(4b)と同じで、「歌う許可を与えた」というニュアンスが含まれる。「歌う」という動詞に限れば、「歌わせる(gawānā)」という使役動詞は使用頻度が低く、上記(3)が使役表現も兼ね、その差は文脈に頼っている。

(4a) (遊びたがっている子どもに無理矢理)母は子どもにパンを買いに行かせた。

mā	ne	bacce	ko	
母 OBL.f.sg.	ERG.pp.	子ども OBL.m.sg.	を DAT.pp.	
roī	lene	bʰejā	hai	
パン f.sg.	取る INF.OBL	送る PERF.m.sg.	コピュラ PRES.sg.	

(4b) (遊びに出たがっているのを見て)母は子どもを遊びに行かせた。

mā	ne	bacce	ko	kʰelne	diyā
母 OBL.f.sg.	ERG.pp.	子ども OBL.m.sg.	を DAT.pp.	遊ぶ INF.OBL.	与える PERF.m.sg.

(3)と同様に、動詞不定詞後置格形+補助動詞 denā という形式が、対象に許可を与えるという意味を持たせる。(4b)では、「子どもが遊びに出たがっているのを見て」母親がそのとおりにさせた(遊ばせた(遊ぶことを許可した))という意味が含まれている。一方で、(4a)の文において、ウルドゥー語では「無理矢理」というニュアンスは含まれず、説明が必要となる。つまり、「子どもにパンを買いに行かせた」という文に、子どもがそれをどう受け取ったかという点は含めることはできない。

(5a) 私は弟に服を着せた(服を着せたのは「私」)。

māī	ne	chōṭe	bʰāī	ko
私 OBL.1.sg.	ERG.pp.	小さい OBL.m.sg.	兄弟 OBL.m.sg.	を DAT.pp.

kapre pahnāe
服 NOM.m.pl. 着せる PERF.m.pl.

(5b) 私は弟にその服を着させた (参考: 服を着せたのは第三者 (二重使役)).

māi ne cʰoṭe bʰāi ko
私 OBL.1.sg. ERGpp. 小さい OBL.m.sg. 兄弟 OBL.m.sg. を DAT.pp.
kapre pahnwāe
服 NOM.m.pl. 着させる PERF.m.pl.

ウルドゥー語の使役動詞は、他動詞からの語形変化により導き出せるものが多い。(5a)が着せる動作を「私」が行っているのに対し、(5b)では、着せる動作は誰かほかの人物が行っている。(5b)は「二重使役動詞」と呼ばれる、仲介者を介する使役動詞による表現である。たとえば、上記(5b)は、以下のようにウルドゥー語では次のような表現もできる。

(5b-1) 私は弟にその服を着させた (着る許可を与えた)。

māi ne cʰoṭe bʰāi ko
私 OBL.1.sg. ERGpp. 小さい OBL.m.sg. 兄弟 OBL.m.sg. を DAT.pp.
kapre pahnne diye
服 NOM.m.pl. 着る INF.OBL. 与える PERF.m.pl.

2つの文で異なる点は、最後の「着させる」という動詞表現である。(5b)では pahnwānā という動詞が用いられている一方で、(5b-1)では、pahnne denā という動詞が用いられている。(5b)が二重使役動詞であるのに対し、(5b-1)は denā が補助動詞の機能を果たしており、弟自身はその服を着たがっていたので、弟が自発的に着た、という意味が含まれている。服は誰かに着せてもらったのではなく、弟が自分で着たということが、動詞 pahnna が用いられていることで明らかとなっている。文法構造上、上記(4b)と同じ「動詞不定詞後置格形+補助動詞 denā」である。

(6) 私は弟にその本をあげた。

māi ne cʰoṭe bʰāi ko
私 OBL.1.sg. ERGpp. 小さい OBL.m.sg. 兄弟 OBL.m.sg. を DAT.pp.
vo kitāb dī
それ NOM.3. 本 NOM.f.sg. 与える PERF.f.sg.

完了分詞を用いる文は、直接目的語と動詞の性・数が一致するという能格構文の代表例である。直接目的語以外は、後置格となる。

(7a) 私は弟にその本を読んであげた。

māī ne cʰoṭe bʰāī ko
私 OBL.1.sg. ERG.pp. 小さい OBL.m.sg 兄弟 OBL.m.sg. に DAT.pp.
kahānī sunā dī
話 NOM.f.sg. 聞かせる STEM 与える PERF.f.sg.

(7b) 兄は私に本を読んでもくれた。

baṛe bʰāī ne mujʰe kahānī
大きい OBL.m.sg. 兄弟 OBL.m.sg. ERG.pp. 私に DAT.1.sg. 話 NOM.f.sg.
sunā dī
聞かせる STEM. 与える PERF.f.sg.

ウルドゥー語では、話者≠文の主語である場合、文の主語の動作の結果を間接目的語に向かわせる（何かをしてくれる）という表現ができない。上記(7b)は「兄が私に話を聞かせてあげた」、つまり、聞かせるという動作が文の主語から間接目的語へ向かうという方向を保った表現である。

(7c) 私は母に髪の毛を切ってもらった。

māī ne mā se apne bāl
私 OBL.1.sg. ERG.pp. 母 OBL.f.sg. から ABL.pp. 自分の 髪 NOM.m.pl.
kaṭwā liye
切らせる STEM もらう PERF.m.pl.

(7c-1) 母は、私に髪の毛を切ってもらった。

mā ne mujʰ se apne bāl
母 OBL.f.sg. ERG.pp. 私 OBL.1.sg. から ABL.pp. 自分の 髪 NOM.m.pl.
kaṭwā diye
切らせる STEM させる PERF.m.pl.

(7b)に対し、(7c)では、文末の補助動詞 liye が、「切らせた」という動作の結果が主語「私」に向かっていることを示している。この文では、話者=文の主語という関係が成立している。(7c-1)では、話者≠文の主語であるが、文末の補助動詞 diye は、「切らせた」という行為を強調する役割となり、(7c)との対照はできない。補助動詞の役割については、今後の課題であり、これ以上の議論は、機会を改めることとしたい。

(8a) 私は（自分の）体を洗った.

māī ne apnā badan d^hoyā
私 OBL.1.sg. ERGpp. 自身の m.sg. 体 NOM.m.sg. 洗う PERF.m.sg.

(8b) 私は手を洗った.

māī ne apne hāt^h d^hoe
私 OBL.1.sg. ERGpp. 自身の m.pl. 手 NOM.m.pl. 洗う PERF.m.pl.

(8c) 彼は（／その人は）手を洗った.

us ne apne hāt^h d^hoe
彼 OBL.3.sg. ERGpp. 自身の m.pl. 手 NOM.m.pl. 洗う PERF.m.pl.

上記3文では、すべて「自身の」という再帰代名詞が用いられている。これらの文では、再帰代名詞が用いられなければ、厳密には「誰の」体や手を洗ったかという判断は文脈に頼ることになる。

(9) 私は（自分のために）その本を買った.

māī ne vo kitāb xarīd lī
私 OBL.1.sg. ERGpp. それ NOM3.sg. 本 NOM.f.sg. 買う STEM. 取る PERF.f.sg.
hai
コピュラ PRES.3.sg.

自分のために買うというニュアンスは補助動詞 lī（元の意味は「取る」）により表現される。この補助動詞がない表現(9a)も文法的に可能だが、買ったという事実を伝えるのみとなる。また、補助動詞を denā（与える）に変えることにより、動作の方向が異なる(9b)。

(9a) 私はその本を買った.

māī ne vo kitāb xarīdī hai
私 OBL.1.sg. ERGpp. それ NOM3.sg. 本 NOM.f.sg. 買う PERF.f.sg. コピュラ PRES.3.sg.

(9b) 私は（第三者のために）その本を買ってあげた.

māī ne vo kitāb xarīd dī
私 OBL.1.sg. ERGpp. それ NOM3.sg. 本 NOM.f.sg. 買う STEM. 与える PERF.f.sg.
hai
コピュラ PRES.3.sg.

(10) 彼らは (／その人たちは) 互いに殴り合っていた。

vo āpas mẽ mārte the
 彼ら NOM.3.pl.¹ おたがいに LOC.pp. 殴る PRES.m.pl. コピュラ PERF.m.pl.

(11) その人たちは (みな一緒に) 町へ出発した。

vo log ikat̪^he šahar par
 それ NOM.3.pl. 人々 NOM.m.pl. 一緒に ADV. 街 OBL.m.sg. に LOC.pp.
 rawānah hue
 出発 ADJ. した PERF.m.pl.

「互いに」、「一緒に」などは、ウルドゥー語では副詞句で表現し、動詞では区別されない。

(12) その映画は泣ける (その映画を見ると泣いてしまう)。

vo film dek^hne se
 それ NOM.f.sg. 映画 NOM.f.sg. 見る INF.OBL. から ABL.pp.
 muj^he āsū ātā hai
 私に DAT.1.sg. 涙 NOM.m.sg. 来る PRES.m.sg. コピュラ PRES.sg.

(13a) 私は卵を割った。

māī ne anḍā torā
 私 OBL.1.sg. ERG.pp. 卵 NOM.m.sg. 割る PERF.m.sg.

(13b) (うっかり落として) 私はコップを割った (／割ってしまった)。

muj^h se gilās tūṭā
 私 OBL.1.sg. から ABL.pp. コップ NOM.m.sg. 割れる PERF.m.sg.

日本語では同じ「割る」という動詞を用いるが、(13b)は意図的に割ったのではないため、ウルドゥー語では「割れる」という自動詞で表現される。「お腹を壊す」や、「財布を落とす」という表現が日本語を学ぶウルドゥー語話者に奇異に感じられるのは、「壊す」や「落とす」が他動詞に分類されるからである。

¹ ウルドゥー語では、3人称を示す人称代名詞、遠称の指示代名詞が、主格では同形で、性、数による形式上の区別がない。

(14a) 昨日私はコーヒーを飲み過ぎて（飲み過ぎたので）眠れなかった。

kal māī zyādah kāfi pīne
昨日 ADV. 私 NOM.1.sg. たくさん ADV. コーヒーNOM.f.sg. 飲む INF.OBL.
se nahī so sakā
から ABL.pp. 否定辞 寝る STM. できる PERF.m.sg.

(14b) 昨日私は仕事がたくさんあって（たくさんあったので）眠れなかった。

kal māī zyādah kām kī
昨日 ADV. 私 NOM.1.sg. たくさん ADV. 仕事 OBL.m.sg. の POS.pp.
wajah se nahī so sakā
理由 OBL.f.sg. から ABL.pp. 否定辞 寝る STEM. できる PERF.m.sg.

ウルドゥー語では、随意、不随意の差が文に現れることはない。なお、話者の意志ではどうにもならない不可能を表す文では、受動態が用いられる（下記(14c)(14d)参照）。

(14c) この石は私にはどうしても持ち上げられない。

ye patt^har muj^h se nahī
これ NOM.sg. 石 NOM.m.sg. 私 OBL.1.sg. より ABL.pp. 否定辞
u^hāyā jātā
持ち上げる PERF.m.sg. 行く PRES.m.sg.

(14d) この手紙はどうしても読めない。

ye xatt ham se nahī
これ NOM.m.sg. 手紙 NOM.m.sg. 我々 OBL.1.pl. より ABL.pp. 否定辞
par^hā jātā
読む PERF.m.sg. 行く PRES.m.sg.

(15) 私は頭が痛い。

mere sar mē dard hai
私の POS.1.sg. 頭 OBL.m.sg. 中に LOC.pp. 痛み NOM.m.sg. ある PRES.sg.

この文は「私の頭の中に痛みがある」という表現である。ウルドゥー語では原則として一文中に主格を取る名詞（相当語）は1つのみであるので、日本語のような構文は不可能となる。一方、次の文は「私には頭痛がある」という表現である。(15)(15a)どちらを用いても、意味に差は出ない。

(15a) 私は頭が痛い.

muj^he sardard hai
私に DAT.1.sg. 頭痛 m.sg. ある PRES.sg.

(16) あの女性は髪が長い.

us xātūn ke bāl lambe
その OBL.3.sg. 女性 OBL.f.sg の POS.pp.m.pl. 髪 m.pl. 長い m.pl.
hāī
コピュラ PRES.pl.

(15)と同様の構文であるため、「その女性の髪は長い」という表現となる。身体部位や家族、親族に関しては所有表現が異なる。以下の3文を参照されたい。身体部位や家族、親族以外の所有表現には(16c)の構文が用いられる。なお、ウルドゥー語には英語の have (持つ) に相当する動詞はない。

(16a) 私には子どもが2人いる.

mere do bacce hāī
私の POS.1.m.pl. 2 NOM. 子ども NOM.m.pl. いる PRES.pl.

(16b) 人間には目が2つある.

insān kī do āk^hē hāī
人間 OBL.m.sg. の POS.pp.f. 2 NOM. 目 NOM.f.pl. ある PRES.pl.

(16c) 私は2冊の本を持っている.

mere pās do kitābē hāī
私の POS.OBL. 近くに ADV. 2 NOM. 本 NOM.f.pl. ある PRES.pl.

(17a) 彼は(別の)彼の肩を叩いた.

us ne us kā kād^hā dabāyā
彼 OBL.3.sg. ERGpp. 彼 OBL.3.sg. の POS.pp.m.sg. 肩 NOM.m.sg. たたく PERF.m.sg.

(17b) 彼は(別の)彼の手をつかんだ.

us ne us kā hāt^h pakṛā
彼 OBL.3.sg. ERGpp. 彼 OBL.3.sg. の POS.pp.m.sg. 手 NOM.m.sg. つかむ PERF.m.sg.

ウルドゥー語では、(17a)(17b)の表現において主語の「彼」と対格の「彼」は別人と認識される。ただし、3人称代名詞では性の区別をしなため、「彼」か「彼女」かの差は上記の文だけでは判断できない。「自分の」肩を叩いたり、手をつかんだり、は再帰代名詞を用

いることにより表現される。上記(8a)(8b)(8c)および(17c)を参照されたい。

(17c) 彼は自分の手をつかんだ。

us ne apnā hāth pakrā
彼 OBL.3.sg. ERGpp. 自身の POS.pp.m.sg. 手 NOM.m.sg. つかむ PERF.m.sg.

(18a) 私は彼がやって来るのを見た。

māi ne use āte hue
私 OBL.1.sg. ERGpp 彼を DAT.3.sg. 来る PRES.m.pl コピュラ PERF.m.pl.
dek^ha
見る PERF.m.sg.

(18b) 私は彼が今日来ることを知っている。

māi jāntā hū ke āj vo
私 NOM.1.sg. 知る PRES.m.sg. コピュラ 1.sg. 接続詞 今日 ADV. 彼 NOM.3.sg.
āe gā
来る FUT.m.3.sg.

(18a)は、「彼」「来る」の双方が「見る」の目的語として表わされている。文の主語((18a)の場合「私」と目的格に置かれる対象が異なる場合、動詞は常に男性複数形を取る。一方で、主語と目的格の対象が同一の場合、その主語の性・数に応じた変化をする(下記(18c)(18d)を参照)。

(18c) 彼は歌を歌いながらやって来た。

vo gānā gātā huā
彼 NOM.3.sg. 歌 NOM.m.sg. 歌う PRES.m.sg. コピュラ PERF.m.sg.
āyā
来る PERF.m.sg.

(18d) 彼女たちは歌を歌いながらやって来た。

vo gānā gātī huī
彼女たち NOM.3.pl. 歌 NOM.m.sg. 歌う PRES.f. コピュラ PERF.f.
āī
来る PERF.f.pl.

(19) 彼は自分（のほう）が勝つと思った。

us ne socā ke vo jīte gā
 彼 OBL.3.sg. ERGpp. 考える PERF.m.sg. 接続詞 彼 NOM.3.sg. 勝つ FUT.m.3.sg.

ウルドゥー語においては、いわゆる直接話法、間接話法の厳密な区別はなく、複文における従属節の部分（(19)で接続詞 ke 以下の部分）は、主節との時制等の一致を考える必要はない。

(20a) 私は（コップの）水（の一部）を飲んだ。

māī ne pānī piyā
 私 OBL 1.sg. ERGpp. 水 m. 飲む PERF.m.sg.

(20b) 私は（コップの）水を全部飲んだ。

māī ne pānī pī liyā
 私 OBL.1.sg. ERGpp. 水 m. 飲む STEM. もらう PERF.m.sg.

(20b)は、補助動詞 liyā を付加することにより、動作が完了したことを表している。それに対し、(20a)は「水を飲んだ」という事実のみを伝えており、どのくらいの水を飲んだのかは、動詞からは判断できない。

(21) あの人は肉を食べない。

vo gošt nahī k'hātā
 彼 NOM.3.sg. 肉 m.sg. 否定辞 食べる PRES.m.sg.

この表現は、ウルドゥー語では通常の否定文として表現される。

(22a) 今日は寒い。

āj sardī hai
 今日 ADV. 寒さ NOM.f.sg. ある PRES.sg.

(22b) 私は（何だか）寒い（寒く感じる）。

muj^he sardī lagtī hai
 私に DAT.1.sg. 寒さ NOM.f.sg. 感じる PRES.f.sg. コピュラ PRES.sg.

天候や気候の表現では、「暑さ」や「寒さ」が文の主語になる。一方、人がどう感じる

かを表現するには、与格構文²が用いられる。空腹やのどの渇き、服が似合っているかどうか、好き嫌いなどの表現にも、ウルドゥー語では与格構文が好んで用いられる。

(22c) 私は眠い。

muj^he nīd ātī hai
私に DAT.1.sg. 眠気 NOM.f.sg. 来る PRES.f.sg. コピュラ PRES.sg.

(22d) 私はウルドゥー語ができる。

muj^he urdū ātī hai
私に DAT.1.sg. ウルドゥー語 NOM.f.sg. 来る PRES.f.sg. コピュラ PRES.sg.

(23) 私は人がとても多いのに驚いた。

māī bahut ḥairān ho gayā ke log
私 NOM.1.sg. とても ADV. 驚いた ADJ. 行く PERF.m.sg. 接続詞 人々 NOM.m.pl.
zyādah hāī
たくさん ADV. いる PRES.pl.

(23)の表現では複文が用いられているが、ウルドゥー語では喜怒哀楽の表現に与格構文が多用される。

(23a) 私はうれしい。

muj^he xuššī hai
私に DAT.1.sg. うれしさ NOM.f.sg. ある PRES.sg.

(24) 雨が降ってきた。

bāriš hone lagī
雨 NOM.f.sg. ある INF.OBL. 付く PERF.f.sg.

(25) その本はよく売れる。

vo kitāb bahut biktī
それ NOM.3.sg. 本 NOM.f.sg. たくさん ADV. 売られる PRES.f.sg.

² 与格構文とは、意味上の主語が与格を示す後置詞 ko をともなう構文を指す。文構造は能格と同一といえるが、与格後置詞 ko をともなう人称代名詞の変化が、ほかの後置詞をともなう場合と異なるため、与格構文として区別した。

hai

コピュラ PRES.sg.

(25a) このナイフはよく切れる。

ye	cāqū	acc ^h ā	kāṭṭā
これ NOM.3.sg.	ナイフ NOM.m.sg.	よく ADV.	切る PRES.m.sg.

hai

コピュラ PRES.sg.

(25)の動詞は自動詞、(25a)の動詞は他動詞である。本自体が何かの動作をすることはないので自動詞を用いるが、ナイフは、それを使って何かを「切る」ために使うので、「切られる」という自動詞を使うことはできない。

5. 結びに代えて

本稿では、例文を参照しつつ、ウルドゥー語のヴォイスを扱った。ウルドゥー語の動詞は、変化こそ規則的だが、補助動詞³を用いる表現が非常に豊富で、その組み合わせにより、今回のテーマであるヴォイスや、テンス、アスペクトを表現する。日本語を母語とするものから見ると、決して学習しにくい言語ではないが、能格構文や与格構文の多用、受動態が用いられる環境が制限されている点、自動詞と他動詞とを厳密に区別する点など、その構造には気をつけるべき点が多いことにあらためて気づかされる。なかでも、補助動詞を用いる表現は研究対象として興味深く、補助動詞のあるなしで表現にどのような差異があるのかについては、現在構築を進めているコーパスに基づいた分析が必要である。したがって、この点については今後の課題としたい。

最後になりましたが、本稿執筆にあたり、ウルドゥー語文のチェックおよび貴重なアドバイスを、アーミル・アリー・ハーン先生（東京外国語大学教員。カラーチー（パキスタン・イスラーム共和国）出身。母語はウルドゥー語）にいただきました。ここに記して謝意を表します。

³ これまでは複合動詞という呼称が用いられていたが、文中での役割を考慮して本稿では、補助動詞という用語を用いた。

参考文献

日本語

鈴木 斌, 1981, 基礎ウルドゥー語 東京: 大学書林

日本語以外

Beg, Mirza Khalil. 1988. *Urdu grammar: history and structure*. New Delhi: Bahri Publications.

Hook, Peter Edwin. *The Hindi compound verb: what it is and what it does*. in *Readings in Hindi-Urdu linguistics*. ed. by Kripa Shanker Singh. 1978. pp.130-157. New Delhi: National Publishing House

Masica, Collin P. 1991. *The Indo-Aryan languages*. New York: Cambridge University Press.

mustafā, ḡulām. 1973. *jāme`al-qawāid: hissa-e nahav*. lāhaur: markazī urdū bord

略語表

ABL.	奪格	f.	女性形	pl.	複数形
DAT.	与格	m.	男性形	sg.	単数形
ERG.	能格	STEM.	語幹		
LOC.	位置格	PRES.	未完了分詞		
NOM.	主格	PERF.	完了分詞		
OBL.	後置格	FUT.	單純未来形		
POS.	所有格	INF.	不定詞		
ADJ.	形容詞	pp.	後置詞		
ADV.	副詞				

転写記号

短母音

長母音

a[ə] i[i] u[u] ā[a:] e[e:] ī[i:] o[o:] ū[u:] ai[æ:] au[ɔ:]

鼻母音

ā[ā] ī[ī] ū[ū] ā̄[ā:] ē[ē:] ī̄[ī:] ō[ō:] ū̄[ū:] āī[ā:] āū[ā:]

子音

		両唇音		唇歯音		歯音		反舌音		硬口蓋音		軟口蓋音		咽頭音	
		無声	有声	無声	有声	無声	有声	無声	有声	無声	有声	無声	有声	無声	有声
閉鎖音	無気	p	b			t	d	t̪	d̪	c	j	k	g	q	
	有気	p ^h	b ^h			t ^h	d ^h	t̪ ^h	d̪ ^h	c ^h	j ^h	k ^h	g ^h		
鼻音	無気		m			n									
	有気		m ^h			n ^h									
摩擦音				f	v	s	z			ʃ	ʒ	x	ɣ	h	
流音	無気					r		ɽ							
	有気							ɽ ^h							
側音	無気					l									
	有気					l ^h									
半母音					w						y				